

女子大学生における中学・高等学校の スクールカウンセラーに対する認識と要望

—学科別及び経験別による比較—

**Female university students' perceptions and needs regarding junior high and
high school counselors : Comparison by university department and
experience using counseling**

関 屋 舞

Mai SEKIYA

(日本女子大学 人間社会研究科 心理学専攻 博士課程前期)

要 約

本研究の目的は、女子大学生（286名）を対象として、スクールカウンセラー（以下SC）に対する認識及び要望について検討することである。初めに、SCに対する認識及び要望について質問紙を実施し、学科及び利用経験による相違の有無を明らかにした。分散分析の結果、心理学科の学生は他学科の学生より認識尺度の「SCの職務」の得点が有意に高いことが明らかとなった。また、SCの利用経験がある学生は利用経験がない学生より認識尺度の「SCの佇まい」及び、要望尺度の「業務充実の強化」の得点が有意に高いことが明らかとなった。次に、「将来子どもを持つ親になった際に、SCに求めること」を自由記述にて回答を求め、内容分析を行った。その結果、「SCのポジション」「保護者との関わり」「環境・制度に関する要望」「日常生活における要望」「SC本人に対する要望」「カウンセラー室を実際に訪れた際の要望」「基本的態勢」にカテゴリ化された。

[Abstract]

The purpose of this study is to investigate the perceptions and needs of female university students for school counselors. A total of 286 participants were asked to complete a questionnaire about perceptions and needs regarding school counselors, and the differences according to the participants' department and in their experience using school counselors were analyzed. The results are as follows: first, students who belonged to the department of psychology rated significantly higher on the recognition of "school counselor's duties" than those belonging to other departments; second, students with experience using school counselors rated significantly higher on the perception of "school counselor's appearance" and on the desire of "improvement in work enrichment" than those without experience using counselors. Additionally, a free description questionnaire was administered to all participants, which included the question: "What would you desire from school counselors for your children in the future?" And 7 categories were generated.

I. 問題

スクールカウンセラー（以下SCと略す）とは、教師へのコンサルテーションと、児童生徒や保護者に対してカウンセリングを行う者である。「心の専門家」と呼ばれるSCは、1995年に文部省（現文部科学省）の「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」の開始と共に導入された。平成26年度までに、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校を含む22013校に配置された。また、地震災害や事故等が起こった際には、都道府県等の要請に応じてSCの緊急支援派遣を行っている（文部科学省，2014）。

SCについて、必要性に係る意識を尋ねた研究では、SCの必要性を感じていると回答した学校（小中高を含む）は96%を占めた（文部科学省，2015）。「心の専門家」としての指導や助言を求める声に応えようと、年を追うごとにSC配置校数は増加を示し、活動の幅も広がりを見せている。平成18年には、全国の中学校約1万校へのSCの配置が実現している。また、東京では、2008年以降にSCの小学校配置が本格的に始まり、2011年から高等学校でのSC配置校数が60校から100校へと増加した（金屋，2012）。今後さらに期待されるSC事業は、より社会に貢献していけるよう、活動を強化していかなければならない。その為にも、より多くの人に認知される必要があるだろう。

こうしたSC活動に関する調査研究は、いくつも進められてきた。伊藤（1999）は、SCの役割やガイドラインに挙げられた活動内容等のSC制度に対して、SCはどのように自己評価しているのかを明らかにし、そのSC活動と学校要因との関連について考察を試みている。また、神尾・生島（2004）は、外部の専門家であるSCが学校現場においてどのような役割を果たすべきか、とりわけ教職経験のないSCがその外部性を生かして学校システムに介入する意義について検討するために、中学校において構成的グループ・エンカウンターを試み及び評価を行っている。さらに、堀尾（2012）は、SCに関する研究動向を取り上げて、学校におけるSCの活動と問題点を検討し、学校現場にてSCを活用していくための留意点や課題についてまとめている。この様に、SC導入から現在に至るまで数多くの研究が取り組まれてきたが、中でも、利用者を対象としたSC評価の研究が多く見受けられる。利用者は主に教師・保護者・児童生徒の3つとされる。

教師を対象とした研究として、吉澤・古橋（2009）は、SCと共に働く公立中学校教師100名を対象に質問紙調査を行い、中学校現場におけるSC制度がどの程度定着しているのかを明らかにした。その結果、SCとの連携経験のある教師だけではなく、連携経験のない教師もSC制度拡充に高い必要性を求め、SCとの連携を望んでいた。また、6割の教師がSCの常勤を求めている。以上のことから、教師の立場からよりSC制度を活用しやすくする為、SCの勤務形態の改善が必要となると判断し、SCには学校臨床心理士として、様々な心理的問題に対処していく力量や知識を高めてほしいと述べている。

保護者を対象にした研究として、中西・黒沢・森（2004）は、私立女子中高等学校の保護者213名を対象に質問紙調査を行い、SC活動をどのように評価し、またSCにどのような要望を持ち、それはSC活動を経る前と比べてどう変化したのかを明らかにした。その結果、活動内容やカウンセラー室に対する評価は「分からない」という回答が非常に多く見られたことが分かった。また、保護者による要望がSC導入直後と1年後では、生徒集団への援助や地域との連携に対し

て高くなかったことが明らかとなった。

児童生徒を対象とした研究として、佐光・時田・千明（2007）は、中学生 449 名を対象に質問紙調査を行い、生徒と SC との関わり状況や SC へのイメージ、SC への相談ニーズを明らかにした。その結果、SC の派遣や相談室の存在を知らない生徒が半分に及び、SC と話したことがある生徒及び相談室に来談したことがある生徒は 1 割弱であり、SC に必要があれば相談してみたいと回答した生徒が全体の 3 割であることが分かった。また、SC に対するイメージにおける因子分析の結果、「受容的イメージ」「身近なイメージ」「静的なイメージ」が挙げられ、相談ニーズとの関連から、日常的な SC の相談活動を通して、SC に対する肯定的・プラスイメージを高めていく工夫や努力が重要であると述べている。

公立中学校への SC の配置が進み始めた 2008 年及び高等学校への SC の配置校が一挙に増えた 2011 年以降の時期にそれぞれ中学生、高校生であった大学生を「SC の過去のユーザー」として対象にした調査研究が近年増えてきている。例えば、石原（2012）は、大学及び短期大学生 174 名を対象に質問紙調査を行い、SC の認識を明らかにした。その結果、SC と関わる経験をしていない者は否定的な認識をし、経験があった者ほど肯定的に評価したことから、関わりなければ理解されにくいといった SC の現状が明らかとなった。さらに、伊藤（2014）は、子ども心理学科に所属する女子大学生 56 名を対象に質問紙調査を行い、「SC の仕事とはどのようなものか」「SC への要望」といった SC の認識や相談ニーズ、SC 評価を明らかにした。その結果、中学校での SC の有無について 8 割の認知があったものの、SC 利用には至っていないことが分かった。また、悩みを相談したいというニーズあることが伺えた為、生徒が恥やためらいなく相談できる様な働きかけが重要であると述べている。

「SC に対してあった相談等の割合」によると、SC の配置が多い中学校については、約 5 割が児童生徒、約 3 割が教職員、約 2 割が保護者からの相談であった（文部科学省、2007）。学校に所属する全ての児童生徒が、第一義的に SC の対象であるとされている。その為、SC の現在のユーザーである児童生徒を対象にした研究が、SC 事業の改善・向上に繋がり、最も有効的だと思われる。しかし、本間（2011）は、調査による児童生徒本人への影響を考えた場合、児童生徒を対象とした研究は実質的には難しいと述べている。そこで、石原（2012）は、適応的に生活をしている大学生を対象として、SC に対する認識を本人の自由意志で回答するならば、本人に悪影響を及ぼすまでとは考えられないと推測した。また、現大学生は中高生の頃に SC が配置されていた経験がある為、その経験を基にした SC の認識を問うことは可能だと述べている。

II. 目的

精神的ストレスを抱えた際、SC のような専門家に援助を求めることは、抱えている問題の深刻化を防ぐために重要であるとされる。こうした他者に援助を求める行動は援助要請と呼ばれ、男性よりも女性の方が起こしやすいということが過去の研究で明らかとなっている（e.g. Leong & Zachar, 1999）。このことから、女性の方が、より SC に援助を求める機会が多くなることが予測される。また、援助を求めるという体験を主観的に捉えた際に、その対象とされる SC への認識や要望を明らかにする際にも性差が生じることが予測される。さらに、それは将来

親になった際も同様であり、子どものことでSCに相談するという行動を考えると、女性を対象とすることは意義があると言えるだろう。以上のことから、本研究では、調査対象者の質の均一性を保つために、女子大学生のみを対象として、SCに対する認識と要望を明らかにすることを目的とする。特に、学科による違い及び利用経験による違いがSCへの認識、SCへの要望にどのように関連しているかを明らかにしたい。そこで、以下の4つの仮説を検証する。

(仮説1-1) 心理学科とその他の学科では、心理学科の方がSCへの認識が高い。

(仮説1-2) 心理学科とその他の学科では、心理学科の方がSCへの要望の声が高い。

伊藤(2014)の研究は、近い将来、心理的サポートに携わる職業に就くことを希望する人が多い心理学科の学生のみを対象としていた為、専門知識を踏まえた内容が挙げられ、SCの現状を客観的に分析した記述が目立ったとされた。さらに幅広い学科の学生を対象とした調査を実施することが今後の課題であると述べている。日頃から心のメカニズムを解き明かし、援助や精神的ケアの方法を実践的に学んでいる心理学科の学生であれば、SCへの認識やSCへの要望の声は他の学科の学生よりも高いと推測できる。そこで、本研究では、心理学科の学生だけでなく、複数の学科の学生を調査対象者とし、心理学科の学生と他学科の学生の2群間で、SCへの認識及び要望に差が出るのかを検証したい。

(仮説2-1) 利用経験あり群と利用経験なし群では、利用経験あり群の方がSCへの認識が高い。

(仮説2-2) 利用経験あり群と利用経験なし群では、利用経験あり群の方がSCへの要望の声が高い。

石原(2012)が行ったSCの認識を調査した研究では、SC認識とSCとの関わり経験との関連において、「関わり有群」の肯定的認識が高かったと報告されている。SCの利用経験がある学生は、SCと実際に接した体験がある為、利用経験がない学生に比べてSCを理解していると推測できる。また、石原(2012)は、相談の実質的な有用性を高める為には、相談しやすい環境を整える必要があるとし、相談環境に関する認識を捉えるための項目をさらに検討することが今後の課題であると述べている。そこで、本研究では、相談環境に関する項目を増やし、SCの利用経験がある学生と利用経験がない学生の2群間で、SCへの認識及び要望に差が出るのかを検証したい。

伊藤(2014)の研究から、小学校でのSCの有無について6割の学生が存在を認知しておらず、SC利用もされていないことから、小学校当時はSCについて把握していなかった学生が多いと判断された。そこで、本研究では、4校に3校と高い割合でSCが配置されている中学校と、一番記憶が新しい高等学校のSCに対する認識と要望について回答を求める。

加えて、保護者の立場になった際に、SCに対してどのようなことを求めるのかを明らかにしたい。日本のうつ病等の気分障害患者数は1996年には43.3万人であったが、2008年には104.1万人と大幅に増加している(厚生労働省, 2011)。その傾向は子どもでも同じだとされる。子どもにおける心の病気は比較的身近に見られ、誰もがなり得る可能性がある。近い将来結婚・妊娠・出産を経験し、子どもを持つ立場になり得る現大学生も、この実態を把握しておかなければならないだろう。そこで、現大学生に、子どもにとって一番身近な存在である“親”と自分を仮定してもらおう。そうすることにより、より具体的で現実的な回答が得られると考える。さらに、現大

学生は SC が配置されていた経験がある為、現在の SC 活動を頭に置きながら、改善及び向上を主とした意見が多く挙げられると推測できる。

Ⅲ. 方法

1. 調査項目の作成

石原（2012）が作成した SC の認識についての質問項目に職務や周囲との協働に関する認識の項目を新たに追加し、SC への認識に関する心理尺度を独自で作成した。さらに、伊藤（2014）の SC の仕事の認識に関する自由記述と、佐光・時田・千明（2007）の SC に対する意識の質問項目を参考に、「周りとの連携」「援助」「第一印象」「ヒアリング」「第三者としての関わり」「専門的任務」「受容的態度」の項目を作成した。

SC への要望に関する心理尺度についても、適当な既存尺度が見当たらなかった為、独自で作成した。伊藤（2014）の SC への要望に関する自由記述を参考に、「SC 本人への要求」「カウンセリング室への要求」「SC と教師の協働に対する要求」「相談システムへの要求」の項目を作成した。

これらの質問項目について、大学生 3 年生 10 名を対象に予備調査を行い、答えやすさや表現のわかりやすさについて意見を求め、それをもとに修正した。最終的に、「SC に対する認識尺度」32 項目、「SC に対する要望尺度」21 項目を選定した。

2. 調査内容

1) フェイスシート

年齢、学年、学科の記入を求めた。

2) 在学していた中学校及び高等学校の情報

回答者の出身校についての様子を把握する為の項目である。在学していた学校の種類（国立・公立・私立）、在学していた学校の SC の有無（いた・いなかった・不明）、SC がいたと回答した場合の SC 利用の有無（した・しなかった）を中学・高等学校それぞれ回答を求めた。

3) SC に対する認識尺度

中学・高等学校の SC に対する認識を尋ねる質問を 32 項目用意した。32 項目それぞれについて「1. 思わない」～「5. そう思う」の 5 件法で回答を求めた。

4) SC に対する要望尺度

中学・高等学校の SC に対する要望を尋ねる質問を 21 項目用意した。21 項目それぞれについて「1. 思わない」～「5. そう思う」の 5 件法で回答を求めた。

5) これからの SC に対する望みの自由記述

「あなたが将来子どもを持つ親になった際、子どもの通う中学・高等学校のスクールカウンセラーに求めることとは何ですか」と尋ね、自由記述形式にて回答を求めた。

3. 調査期間

2017 年 10 月

4. 調査対象

A 大学に通う女子大学生 290 名から質問紙を受け取り、回答に不備があったものを除いた 286 名（心理学科の学生:144 名, 他学科の学生:142 名）を分析対象とした。平均年齢は 19.5 歳であった。学年は 1～4 年であった。

5. 調査方法

講義終了後に調査の主旨を説明し、質問紙を配布した。その場で回答してもらい、質問紙の回収もその場で行った。

6. 倫理的配慮

無記名で回答を求めた。研究の目的・方法、参加・辞退の自由、データの取り扱い、個人情報の保護をフェイスシートと口頭で説明した。質問紙提出をもって調査に同意したとみなした。

7. 分析方法

調査対象者の SC に対する認識及び SC に対する要望を把握するために因子分析を行った。続いて、学科及び利用経験による相違を明らかにするために、因子分析により得られた下位尺度を用いて一要因分散分析を行った。石原（2012）の研究において、尺度得点に影響を与えると仮定した要因は SC との関わり経験の 1 要因のみであり、2 つの要因が組み合わさることで現れる相乗効果については検討していない。その為、今回の研究では先行研究に倣い、「学科」と「利用経験」という 2 つの独立変数を組み合わせた交互作用については検討していない。なお、統計処理には SPSS for Windows Ver.24 を用いた。

自由記述については、客観的なデータを抽出し、カテゴリ化して内容分析を行った。

IV. 結果

1. 在学していた学校の種類、SC の有無、SC 利用の有無

中学校及び高等学校の国公立別は表 1 に示した。

中学校及び高等学校の SC の有無は表 2 に示した。中学校時に「SC がいた」と回答していたのは全体の 84%、高等学校時に「SC がいた」と回答していたのは全体の 74%と、中学・高等学校共に半数以上の生徒が SC を認知していた。

中学校及び高等学校の SC の利用有無は表 3 に示した。中学校又は高等学校で「SC を利用した」と回答していたのは全体の 19%であった。利用率は低いものの、他学科の生徒のみでの割合が 11%に対し、心理学科の生徒のみでの割合は 22%と僅かに高かった。

表 1. 調査対象者の中学校及び高等学校の国公立別

		国立	公立	私立	無回答	合計
心理学科	中学校	1	92	50	1	144
	高等学校	1	59	83	1	144
他学科	中学校	7	76	59		142
	高等学校		46	96		142

表 2. 調査対象者の中学校及び高等学校の SC の有無

		いた	いない	不明	無回答	合計
心理学科	中学校	127	4	12	1	144
	高等学校	113	14	16	1	144
他学科	中学校	113	12	17		142
	高等学校	99	8	35		142

表 3. 調査対象者の中学校及び高等学校の SC の利用有無

		利用経験あり	利用経験なし
心理学科	中学校	22	122
	高等学校	15	129
他学科	中学校	9	133
	高等学校	7	135

2. SC に対する認識

1) SC への認識における項目分析

SC への認識尺度 32 項目にて記述統計量を算出し、得点分布の確認を行ったところ、「SC は専用の教室に籠っている印象がある」「SC はどんな生徒でも受け入れる」「SC には守秘義務がある」の 3 項目で天井効果と考えられる得点分布の偏りが見られた為、これらの項目を除外し、残りの 29 項目を以降の分析対象とした。

2) SC への認識における因子分析

項目分析にて除外した項目以外の 29 項目について、「思わない」1 点から「そう思う」5 点で得点化し、因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。因子数は固有値の変化が 8.52, 2.73, 2.08, 1.68, 1.37 だったことから 3 因子と仮定し、再び因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。その結果、因子負荷量が .350 を下回った「SC は教師という枠から外れている存在である」「SC は学校という枠から外れている存在である」「SC は相談したい時にいないことがある」「SC は学力・進路への対応を行う」の 4 項目を除外し、再び因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。最終的な因子パターンは表 4 に示した。

第 1 因子は 12 項目で構成されており、「SC は解決策を共に考えてくれる」「SC は気持ちを前向きにしてくれる」「SC は陰で支えてくれる存在である」など、心の支援者としての働きに関する項目が高い負荷量を示した。そこで「SC によるサポート」因子と命名した。 α 係数は 0.91 であっ

表4. SCへの認識による因子分析(主因子法,プロマックス回転)

	因子負荷量		
	1	2	3
第1因子「SCによるサポート」			
SCは解決の為の手がかりを教えてくれる	0.848	-0.183	0.086
SCは解決策を共に考えてくれる	0.836	-0.147	-0.073
SCは誰にも相談できない悩みを聞いてくれる	0.811	-0.09	-0.005
SCは気持ちを前向きにしてくれる	0.77	-0.041	0.057
SCは生徒の心のよりどころである	0.739	0.008	0.016
SCは陰で支えてくれる存在である	0.7	0.021	-0.005
SCは悩みを共有してくれる	0.7	0.028	0.053
SCは言いたいことを言えるように促してくれる	0.667	0.122	-0.081
SCは信頼できる大人である	0.644	0.051	0.041
SCは愚痴を聞いてくれる	0.504	0.05	0.131
SCは生徒の精神的ケアを行う	0.436	0.158	0.148
SCは個人の悩みへの対応を行う	0.359	0.146	0.176
第2因子「SCの職務」			
SCは教員と連携している	-0.222	0.762	0.063
SCは学校が良い方向へ向かうよう協力してくれる	0.166	0.62	-0.033
SCは発達障害児への対応を行う	0.006	0.595	-0.029
SCは不登校問題への対応を行う	0.069	0.589	0.037
SCは保護者の話を聴く	-0.037	0.564	0.036
SCは他の専門機関と連携している	-0.126	0.548	-0.1
SCは教員の話聴く	-0.04	0.471	0
SCは家庭が良い方向へ向かうよう協力してくれる	0.343	0.461	-0.082
SCはいじめ問題への対応を行う	0.216	0.451	-0.054
第3因子「SCの佇まい」			
SCの雰囲気は暗い	0.056	0.009	-0.806
SCの雰囲気は温かい	0.027	-0.02	0.765
SCの雰囲気は冷たい	0.001	0.05	-0.758
SCの雰囲気は明るい	0.059	-0.001	0.614

表5. SCへの認識の因子間相関

因子	1	2	3
1	1	0.56	0.437
2	0.56	1	0.27
3	0.437	0.27	1

た。第2因子は9項目で構成されており、「SCはいじめ問題への対応を行う」「教員の話聞く」「保護者の話を聞く」など、日々の業務内容に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「SCの職務」因子と命名した。 α 係数は0.82であった。第3因子は4項目で構成されており、「SCの雰囲気は温かい」「SCの雰囲気は明るい」など、SCの見た目や印象、イメージに関する項目が高い負荷量を示した。そこで「SCの佇まい」因子と命名した。 α 係数は0.82であった。3因子それぞれの α 係数から、内的一貫性が十分認められたと判断した。なお、因子負荷量が負であった項目については、逆転項目とした。3つの因子の因子間相関は表5に示した。

3) SCへの認識と学科の関連

SCへの認識に対する学科別の影響を見る為に、分散分析を行った。因子分析により得られた「SCによるサポート」「SCの職務」「SCの佇まい」の3つを独立変数、対象者である「心理学科」「他学科」を従属変数とした。その結果は表6に示した。「SCの職務」については、他学科よりも心理学科の方が5%水準で有意に高い得点を示していた ($F(1,284) = 4.391, p < .05$)。「SCによるサポート」及び「SCの佇まい」については、学科別による得点差は有意ではなかった (それぞれ $F(1,284) = 0.938, n.s.$; $F(1,284) = 0.045, n.s.$)。

4) SCへの認識と利用経験の関連

SCへの認識に対する利用経験別の影響を見る為に、分散分析を行った。因子分析により得られた「SCによるサポート」「SCの職務」「SCの佇まい」の3つを独立変数、対象者である「SC利用経験あり」「SC利用経験なし」を従属変数とした。その結果は表7に示した。「SCの佇まい」については、SC利用経験なしよりもSC利用経験ありの方が5%水準で有意に高い得点を示していた ($F(1,284) = 6.764, p < .05$)。「SCによるサポート」及び「SCの職務」については、利用経験別による得点差は有意ではなかった (それぞれ $F(1,284) = 2.311, n.s.$; $F(1,284) = 1.899, n.s.$)。

表6. SCへの認識における分散分析の結果 (学科別)

		平方和	自由度 (df)	平均平方 (MS)	F
SCによるサポート	グループ間	0.42	1	0.42	0.938
	グループ内	127.296	284	0.448	
	合計	127.717	285	—	—
SCの職務	グループ間	1.816	1	1.816	4.391*
	グループ内	117.432	284	0.413	
	合計	119.248	285	—	—
SCの佇まい	グループ間	0.026	1	0.026	0.045
	グループ内	168.192	284	0.592	
	合計	168.219	285	—	—

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

表7. SC への認識における分散分析の結果（利用経験別）

		平方和	自由度 (df)	平均平方 (MS)	F
SCによるサポート	グループ間	1.031	1	1.031	2.311
	グループ内	126.685	284	0.446	
	合計	127.717	285	—	—
SCの職務	グループ間	0.792	1	0.792	1.899
	グループ内	118.456	284	0.417	
	合計	119.248	285	—	—
SCの佇まい	グループ間	3.913	1	3.913	6.764*
	グループ内	164.305	284	0.579	
	合計	168.219	285	—	—

*** : p<.001, ** : p<.01, * : p<.05

3. SC に対する要望

1) SC への要望における項目分析

SC への要望尺度 21 項目にて記述統計量を算出し、得点分布の確認を行ったところ、「カウンセリング室は季節に沿った室温であると良い」「カウンセリング内容を担任の教師に知られたくない」「予約しなくともカウンセリングが受けられると良い」の3項目で天井効果と考えられる得点分布の偏りが見られた為、これらの項目を除外し、残りの18項目を以降の分析対象とした。

2) SC への要望における因子分析

項目分析にて除外した項目以外の18項目について、「思わない」1点から「そう思う」5点で得点化し、因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。因子数は固有値の変化が4.09, 2.31, 1.58, 1.36, 1.14 だったことから2因子と仮定し、再び因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。その結果、因子負荷量が.350を下回った「SCは学校の行事に参加しなくて良い」「カウンセリング室は広々とした空間であると良い」「カウンセリング室の照明は明るいが良い」「カウンセリングは予約制だと良い」の4項目を除外し、再び因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。最終的な因子パターンは表8に示した。

第1因子は10項目で構成されており、「SCは心理教育を行うと良い」「SCは各教室を見回る良い」「SCにカウンセラー便りを発行してほしい」など、職務への要望に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「業務充実の強化」因子と命名した。 α 係数は0.81であった。第2因子は4項目で構成されており、「カウンセリング室は校内の目立たない場所にあると良い」「カウンセリングを受けることを担任の教師に知られたくない」など、環境・制度への要望に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「支援制度や環境の改善」因子と命名した。 α 係数は0.73であった。2因子それぞれの α 係数から、内的一貫性が十分認められたと判断した。なお、因子負荷量が高いであった項目については、逆転項目とした。2つの因子の因子間相関は表9に示した。

表 8. SC への要望による因子分析（主因子法、プロマックス回転）

	因子負荷量	
	1	2
第1因子「業務充実の強化」		
SCは生徒への声掛けを行うと良い	0.701	-0.029
SCの存在を知る活動があると良い	0.613	-0.022
SCは心理教育を行うと良い	0.608	0.026
SCはカウンセリング以外でも生徒と交流を持つと良い	0.595	-0.095
SCにカウンセラー便りを発行してほしい	0.533	-0.027
SCは各教室を見回る良い	0.514	-0.014
教師はSCからカウンセリング方法を学ぶと良い	0.491	0.071
SCと教師は常に情報を交換すると良い	0.471	-0.155
教師もSCによるカウンセリングを受けると良い	0.455	0.196
SCが普段から常に学校にいと良い	0.43	0.194
第2因子「支援制度や環境の改善」		
カウンセリング室は校内の目立たない場所にあると良い	0.043	0.815
カウンセリング室はクラスから離れた場所にあると良い	0.037	0.796
カウンセリング室は人の目にはいる場所にあると良い	0.23	
カウンセリングを受けることを担任の教師に知られたくない	0.088	0.38

表 9. SC への要望の因子間相関

因子	1	2
1	1	0.227
2	0.227	1

3) SC への要望と学科の関連

SCへの要望に対する学科別の影響を見る為に、分散分析を行った。因子分析により得られた「業務充実の強化」「支援制度や環境の改善」の2つを独立変数、対象者である「心理学科」「他学科」を従属変数とした。その結果は表10に示した。「業務充実の強化」及び「支援制度・環境の改善」については、学科別による得点差は有意ではなかった（それぞれ $F(1,284) = 1.400$, n.s.; $F(1,284) = 1.031$, n.s.）。

表 10. SC への要望における分散分析の結果（学科別）

		平方和	自由度 (df)	平均平方 (MS)	F
業務充実の強化	グループ間	0.526	1	0.526	1.4
	グループ内	106.705	284	0.376	
	合計	107.231	285	—	—
支援制度や環境の改善	グループ間	0.595	1	0.595	1.031
	グループ内	163.983	284	0.577	
	合計	164.579	285	—	—

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

4) SCへの要望と利用経験の関連

SCへの要望に対する利用経験別の影響を見る為に、分散分析を行った。因子分析により得られた「業務充実の強化」「支援制度や環境の改善」の2つを独立変数、対象者である「SC利用経験あり」「SC利用経験なし」を従属変数とした。その結果は表11に示した。「業務充実の強化」については、SC利用経験なしよりもSC利用経験ありの方が5%水準で有意に高い得点を示していた ($F(1,284) = 4.250, p < .05$)。「支援制度・環境の改善」については、学科別による得点差は有意ではなかった ($F(1,284) = 0.859, n.s.$)。

表11. SCへの要望における分散分析の結果(利用経験別)

		平方和	自由度 (df)	平均平方	F
業務充実の強化	グループ間	1.581	1	1.581	4.25*
	グループ内	105.65	284	0.372	
	合計	107.231	285	—	—
支援制度や環境の改善	グループ間	0.496	1	0.496	0.859
	グループ内	164.083	284	0.578	
	合計	164.579	285	—	—

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

4. SCに関する自由記述

「あなたが将来子どもを持つ親になった際、子どもの通う中学・高等学校のスクールカウンセラーに求めることとは何ですか」と教示し、自由記述形式で回答を求めた。全体の78%にあたる222名(心理学科:116名,他学科:106名)から回答が得られた。

1) 内容分析による分類

書き出された単語及び文をカテゴリ化し、内容分析を行った。その結果112記述単位が抽出され、7つのカテゴリに分類された。また7つのカテゴリは複数のサブカテゴリから構成された(表12)。以下、カテゴリ別にその特徴を記述する。

①【SCのポジション】

実際の具体的記述例として、「第三者的な立場で話を聞いてほしい」「近い存在であってほしいが、教師ほどは近くないような適度な距離を保ってほしい」「学校側の人間というより、独立した立場でいてほしい」等が挙げられた。

②【保護者との関わり】

実際の具体的記述例として、「アンケート形式で調査等して、変化があったら後回しせず、すぐに対応してほしい。その内容を保護者にも伝達してほしい」「保護者向けに”家庭での子ども”の様子を聴くアンケートを実施しても良い」「自分の子どもがカウンセリングを受けた際、内容は一切言わなくても構わないけれど、”受けに来た”ということは教えてほしい」「守秘義務は必要だが、SC自身が分別して、教師や家族に伝えなくてはならないことは、子どもを通さず伝えてもらいたい」「保護者でもSCと話す機会を作って、子どもとどのように接すれば良いか一緒に考えてほしい」等が挙げられた。

表 12. SC に関しての自由記述 (その 1)

カテゴリ	サブカテゴリ	抽出された単語・文	記述数(心理学科:他学科)
SCのポジション		独立した立場でいる	12(7:5)
		中立な立場でいる	
		適度な距離を保つ	
		第三者的立場でいる	
		親でも教師でもない存在	
保護者との関わり		教師や保護者の意見に囚われない人	22(16:6)
		保護者との連携	
		保護者の相談に乗る	
		子どもの状態を教えてほしい	
		子どもの相談内容を教えてほしい	
環境・制度に関する要望	基本的制度	子どもと親をつなぐ架け橋になる	69(36:33)
		子どもが相談に受けに来たと教えてほしい	
		常勤でいる	
		予約制度をなくす	
	周囲との協働	教師を通さなくとも利用できるようにする	
		スクールカウンセラー制度を充実させる	
	周りの状況	話を聞く場を設ける	
		教師との連携	
		他の機関との連携	
日常生活における要望	生徒との関わり	雰囲気づくり	29(14:15)
		環境づくり	
		場所づくり	
		生徒との交流の機会を増やす	
		生徒との関わりを持つ	
		勉強を教える	
	学校への働きかけ	生徒に話しかける	
		子どもと一緒にお昼ご飯を食べる	
		子どもの愚痴を聞く	
	情報の公開	信頼関係を築く	
		学校行事に参加する	
		クラスの見回りをを行う	
SC本人に対する要望	朗らか・温和	心理教育を行う	85(43:42)
		カウンセリングを受けるように促す活動を行う	
		スクールカウンセラーの存在を知らせる	
		スクールカウンセラーがどんな人であるか紹介する	
		やさしさ	
		温かさ	
	誠実・真面目	包容力	
		明るさ	
		居場所になってくれる	
		安心できるような人	
		理解のある人	
		身近な大人	
友好的	頼りになる人		
	信頼できる大人		
	話しかけやすい人		
	相談しやすい人		
プロフェッショナル	話しやすい人		
	色々なことを話せる存在		
	責任感がある人		
	フレンドリー		
	人柄の良さ		
	親身さ		
	親しみやすさ		
	専門知識がある人		
		経験がある人	

表 12. SC に関する自由記述 (その 2)

カテゴリ	サブカテゴリ	抽出された単語・文	記述数(心理学科:他学科)	
カウンセラー室を実際に訪れた際の要望	積極的	解決策を共に考える 解決に近づける 自己決定を促す 子どもの考えを広げる 他人を認められる方法を教える 子どもに原因がある場合は怒る 解決のアドバイス・ヒントを教える 子どもの背中を押す	72(36:36)	
	子ども中心・気持ちの汲み取り	共感している雰囲気を作る 肯定的である 子どもの不安を取り除く 時間をかけて子どもと接する すぐに対応する 子どもと向き合う 悩みを軽くする 悩みを和らげる 子どもを優先する トーンを子どもに合わせる 心のよりどころになる 誰にも相談できないことの受け皿になる 子どもに寄り添う 子どもの気持ちを楽にする 心の安らぎを与える 一人で抱え込まないようにする		
	禁止事項	常識の範囲であれば怒らない 子どもの話を遮らない 分かったフリをしない 子どもを傷つけない 拒む姿勢を見せない 正解・不正解を決めつけない 意見の押し付けをしない 負の方向に子どもを誘導しない 無理に諭さない		
基本的態勢	学校・教師との関わり	学校の状況を理解しておく 子どもと教師を結ぶ懸け橋になる		106(55:51)
	厳守事項	守秘義務 相談内容を漏らさない 誠意をもって関わる 責任を持つ どんな子どもでも認めて受け入れる 悩んでいる子どもを減らす いじめを解決する		
	ヒアリング・思索	悩みを引き出す 子どもの悩みを聞く 子どもの話を聞く 子どもの相談に乗る 悩みを受け止める 子どもの悩みに対し真剣に考える		
	心くばり	子どもをサポートする 子どもを支える 子どもを見守る		
	感づく・見出す	いじめを見つける 子どもの異常に気付く		
	心の回復	精神的ケア いじめを受けている子どもの精神的ケア 不登校の子どもの精神的ケア		

③【環境・制度に関する要望】

『基本的制度』『周囲との協働』『周りの状況』の3つのサブカテゴリで構成された。実際の具体的記述例として、「週5でいた方が学校・生徒の状況を把握できるのではないか」「みんながいつの間にか集まっているような、通いやすい場であってほしい」「SCが有名になり、子どもたちが使いやすい、立ち入りやすい場所になればよい」「A大学のカウンセリング室はとても人目に付く場所にある為、正直入りづらいと感じる」「教師とも話し合って良い環境作りをしてほしい」「学校や家庭との連携を強めることで、保護者も安心すると思う」「子どもが気軽にSCに相談できるように、予約制度をなくし、先生を通さなくとも利用できるように学校に働きかけてほしい」等が挙げられた。

④【日常生活におけるの要望】

『生徒との関わり』『学校への働きかけ』『情報の公開』の3つのサブカテゴリで構成された。実際の具体的記述として、「カウンセリングは悪いことではない、恥ずかしいことではないという認識を子どもたちに持たせてほしい」「心理的成長を促すようなことを行ってほしい」「SCが学校にいるのか、どこの教室でやっているのか知らない子どもが多いと思う。そこで、日頃から声をかけるなどして存在をアピールした方が良い」「本当は助けを求めたいのだけれど、カウンセラー室に入るには抵抗がある、誰かに見られたらどうしようという理由で一步が踏み出せないこともあるかもしれない。その為SCには、カウンセリングに来てくれた人だけに対応するのではなく、自ら学校行事に参加して、生徒の様子を見たり話しかけてほしい」「保健室の先生のように、顔を知って交流できる人が良い」等が挙げられた。

⑤【SC本人に対する要望】

『朗らか・温和』『誠実・真面目』『友好的』『プロフェッショナル』の4つのサブカテゴリで構成された。実際の具体的記述として、「私が中学校・高校生の時、SCがどんな人なのか知らないくらいだった為、子どもたちに身近な存在であってほしい」「法律等の知識も持ち合わせる」「誰にも言ってほしくないことは言わない、といった秘密を守れる信頼のある人であってほしい」「子どもの悩みについて、その子どもが気づいていない側面を教えるのではなく、その子ども自身が気付くように導くことができる技術を求める」等が挙げられた。

⑥【カウンセラー室を実際に訪れた際の要望】

『積極的』『子ども中心・気持ちの汲み取り』『禁止事項』の3つのサブカテゴリで構成された。実際の具体的記述として、「子どもが辛くてどうしようもなくなった時、そのつらさを根本的に解決するのは無理でも、どうか心のよりどころになってほしい」「痛い心を少しでもほどいて柔らかくして、少しずつ外に目を向けさせてほしい」「繊細な時期であるから、教師・親・友人との人間関係の悩みを干渉し過ぎずに、改善に向かうように論じてほしい」「仕事・作業という気持ちでカウンセリングをするのではなく、一人一人に寄り添って、しっかりとカウンセリングを行ってほしい」「教師や保護者との連携も必要かもしれないが、子どもが言いたくないのであれば、子どもの気持ちを優先してあげてほしい」「無理に論じたり、説得したり、答えを出そうとしないしてほしい」等が挙げられた。

⑦【基本的態勢】

『学校・教師との関わり』『厳守事項』『ヒアリング・思索』『心くばり』『感づく・見出す』『心

の回復』の6つのサブカテゴリで構成された。実際の具体的記述として、「その学校の状況をあ
る程度理解しておく必要があると思う。その方が、情報共有するスピードが速まるはず」「生徒
の心のケアを一番できる存在であると思う」「教師に相談したところでちゃんとした解決策は帰っ
てこない為、その部分をSCがサポートしてほしい」「子どものピンチに対してアンテナを張っ
てほしい」等が挙げられた。

2) 記述数による違い

各カテゴリにおける心理学科と他学科による記述数の違いは、【保護者との関わり】において
僅かに見られた。なお、SCの利用経験がある学生と利用経験がない学生とでは大幅に人数が異
なった為、利用経験の有無による記述数の違いは見えていない。

V. 考察

1. SC に対する認識

因子分析の結果、「SCによるサポート」「SCの職務」「SCの佇まい」の3因子が抽出された。

1) SC への認識と学科の関連 (仮説1-1について)

各下位尺度の平均値を比較した結果、「SCの職務」に関して2群間に相違があることが認めら
れたが、「SCによるサポート」及び「SCの佇まい」に関しては相違があることが認められなかつ
た。従って、仮説1-1は「SCによるサポート」及び「SCの佇まい」に対しては支持されなかつ
たものの、「SCの職務」に対しては支持された。

心理学科の学生の中には、SCや臨床心理士などの心理専門職を目指している学生が存在する。
心理学科の講義の中で、心理専門職の職務内容について学ぶこともあれば、自主的に調べる人も
いるだろう。そうした日頃の経験が「SCの職務」に関しての認識を強くしていると考えられる。
「SCによるサポート」及び「SCの佇まい」に関しての認識は、講義の中で学ぶこと、自主的に
調べることができる職務内容とは異なり、実際にSCと接してみないと分からないことであると
考えられる。心理専門職の職務内容を認識している心理学科の学生のすべてがSCの利用経験が
あるとは限らない為、心理学科の学生と他学科の学生の2群間で相違は認められなかったのだと
推察する。

2) SC への認識と利用経験の関連 (仮説2-1について)

各下位尺度の平均値を比較した結果、「SCの佇まい」に関して2群間に相違があることが認め
られたが、「SCによるサポート」及び「SCの職務」に関しては相違があることが認められなかつ
た。従って、仮説2-1は「SCによるサポート」及び「SCの職務」に対しては支持されなかつ
たものの、「SCの佇まい」に対しては支持された。

SCの利用経験がある学生は、その実体験を基に回答したのだと推察する。「SCの佇まい」に
関して、「SCの雰囲気は温かい」「SCの雰囲気は明るい」などの肯定的認識を強くしていること
から、利用経験がない学生よりも利用経験がある学生の方がSCに対して好印象を持っているの
だと考えられる。佐光・時田・千明(2007)が行った研究では、SCに対するイメージについて「地
味な」「無口な」「静かな」等による「静的イメージ」が報告され、SCに対する肯定的かつプラ
スイメージを高めていく工夫や努力が必要であると述べている。これらの指摘は今回の結果と共

通するものであり、特にSCの利用経験がない学生にあてはまることだと考えられる。「SCの職務」及び「SCのサポート」に関しての認識は、SCとの関わり内容が影響すると考えられる。実際に相談したことがある学生は、その際のSCの対応から「SCの職務」や「SCによるサポート」を認識することができる。しかし、授業等でSCと関わり経験がある学生は、職務やサポート内容までは認識できないと考えられる。SCの利用経験があるといっても、「雑談をした」「授業を受けた」「相談をした」など、関わりの内容は異なる為、SCの利用経験がある学生と利用経験がない学生の2群間で相違は認められなかったのだと推察する。

2. SCに対する要望

因子分析の結果、「業務充実の強化」「支援制度や環境の改善」の2因子が抽出された。

1) SCへの要望と学科の関連（仮説1-2について）

各下位尺度の平均値を比較した結果、「業務充実の強化」及び「支援制度や環境の改善」に関して2群間に相違があることが認められなかった。従って、仮説1-2は支持されなかった。

伊藤（2014）が行った研究では、心理学科の学生はSCの現状を客観的に分析した記述が目立っていると報告されている。従って、援助や精神的ケアの方法を実践的に学び、心理専門職に対して認識のある心理学科の学生は、SCの現状を把握した上で、改善すべき点等を含めた要望の声が他学科よりも多く挙がると思われたが、今回の研究では大きな差はないということが明らかとなった。心理専門職に関しての理解がある心理学科の学生でも、その改善点や課題にはまだ目が向けられていないのだと考えられる。また、SCへの認識の高さがSCへの要望の高さに繋がるとは限らないと考えられる。

2) SCへの要望と利用経験の関連（仮説2-2について）

各下位尺度の平均値を比較した結果、「業務充実の強化」に関して2群間に相違があることが認められたが、「支援制度や環境の改善」に関しては相違があることが認められなかった。従って、仮説2-2は「支援制度や環境の改善」に対しては支持されなかったものの、「業務充実の強化」に対しては支持された。

SCへの要望もSCへの認識同様、SCの利用経験がある学生は、その実体験を基に回答したのだと推察する。「業務充実の強化」に関して、「SCは生徒への声掛けを行うと良い」「SCはカウンセリング以外でも生徒と交流を持つ」等が含まれていたことから、利用経験がある学生はSCに積極性を求めていることが明らかとなった。利用経験がある学生は、利用経験がない学生よりもSCに対して好印象を持っているからこそ、交流する機会の増加や関わりやすさを求めているのだと考えられる。「支援制度や環境の改善」に関しての要望は、在学していた学校のSC制度や環境が影響すると考えられる。出身学校のSCにおける支援制度や環境に問題点があれば、改善として多くの要望が挙がると思われたが、SCを利用したことがある学生の出身学校全てにおいて、SCによる支援制度や環境に問題点があるとは限らない。支援制度が充実していて、なお、環境も恵まれていた場合もある。その為、SCの利用経験がある学生と利用経験がない学生の2群間で相違は認められなかったのだと推察する。

3. SC に関する自由記述

自由記述から報告された内容を分類した結果からは、7つのカテゴリが認められた。

1) 各カテゴリ

①【SCのポジション】

SCには「学校」といった1つのグループに所属するのではなく、「心の専門家」として独立した立場の確立を求めていることが明らかとなった。SCの「外部性」は、教育の専門性を持っている教員とは異なる、臨床心理の専門性を生かすことができるとされている（文部科学省）。その「外部性」を活用した上で、SCは児童生徒と関わる必要があると考えられる。また、SCは児童生徒と接する際に心理的距離感を意識する必要があると考えられる。心の距離が近くなりすぎると過度に感情移入してしまい、適切な判断を下すことができなくなる。逆に遠くなりすぎると意思の疎通が取れず、お互いに心を開くことができなくなる。児童生徒が心地よいと感じられる適切な距離感を保つことが重要であろう。

②【保護者との関わり】

子どもの状況を親である自分も把握しておきたいことが明らかとなった。生徒本人だけでなく保護者にも目を向け、連携を取り合いながら解決に努める必要があると考えられる。また、「子どもが相談に来たことを周囲に言わないほしいと言った場合は言わなくても良い」という記述が見受けられたことから、子どもの気持ちが大前提であることが明らかとなった。

③【環境・制度に関する要望】

公立中学校をはじめとして、勤務形態は非常勤が多いSCは、1校当たりの勤務時間数が限られている為、「相談したいときにいない」といった児童生徒による問題の状況に柔軟に応じることのできない現状の改善における要望が挙がったのだと考えられる。また、カウンセラー室の入りづらさを問題視している内容の記述が多く見受けられ、誰もが入りやすいと思えるカウンセラー室作りを求めていることが明らかとなった。

④【日常生活における要望】

学校に所属する全ての児童生徒が、第一義的にSCの対象である為、SCは認知されていなければならない。しかし、SCの存在が学生にあまり知られていないことを問題視している記述が多く見受けられたことから、SCの認知度はまだ低いことが明らかとなった。認知される為には、可能な限り学校行事に参加することが望ましいとされている（文部科学省）。SCは学校及び児童生徒との交流を積極的に図る必要があると考えられる。

⑤【SC本人に対する要望】

回答者がそれぞれ接したいと思えるSC像が現れたと考えられる。全体を通して、大らかな性格で誰もが話しやすいと思える存在、かつ、信頼の置けるSCを多くの人が求めていることが明らかとなった。また、「誠実・真面目」に関する記述数が最も多かったことから、人望が厚く、どんな児童生徒でも対等に接する裏表のないSCを求めているのだと考えられる。

⑥【カウンセラー室を実際に訪れた際の要望】

悩みを解くよう求める内容の記述が目立ったことから、学校ではカバーしきれない児童生徒の問題に対応するというSCの役割が期待されていることが明らかとなった。悩んでいる子どもの胸中を察した上で、SCとしての適切な行動を求めているのだと考えられる。

⑦【基本的態勢】

「心くばり」「感づく・見出す」という記述から、教師や親が気づかないことにも、繊細に目を向けることができる SC を求めていることが明らかとなった。また「ヒアリング・思索」に関しての記述数が最も多かったことから、SC はどんな問題・悩みにも必ず耳を傾け、児童生徒を理解しようと努める姿勢を目指す必要があると考えられる。

2) 全カテゴリを通して

数多くの要望があらゆる側面に向けられていることが明らかとなった。なかでも最も記述数の多かったカテゴリは「基本的態勢」、2 番目に多かったカテゴリは「SC 本人に対する要望」であり、「心の専門家」としての接し方やあるべき姿を見直す必要があると考えられる。さらに「SC の存在を知る機会がなかった」「通っていた中学校の SC は暗い人だった」などというネガティブな実体験を基にした内容の記述が多く見受けられたことから、SC 活動にはまだ多くの改善点があることが明らかとなった。

VI. 今後の課題

学校によって SC の配置状況や活用状況は異なる。調査対象者の出身学校における SC 制度や環境、SC を利用した経験がある対象者における関わり内容を分析していない点や、調査対象者が中規模であった点から、今回の研究結果を一般化することはまだできないと推察する。今後は、調査対象者の出身学校における特徴を細かく分類し分析する必要があるだろう。さらに、女子大学生のみではなく、男子大学生をも対象とした調査を実施し、性別による差が生じるのか検討することが課題と考える。

引用文献

- 堀尾良弘 (2012). 「学校におけるスクールカウンセラーの活用とその展望」 人間発達学研究, 3, 53-60.
- 本間友巳 (2011). 「最近の研究成果——スクールカウンセラー活動への評価を中心に」 臨床心理学増刊 第 3 号 (スクールカウンセリング 経験知・実践知とローカリティ), 金剛出版, 128-133.
- 石原みちる (2012). 「スクールカウンセラーに対する大学生の認識——スクールカウンセラーとの関わり経験による比較」 山陽論叢, 19, 1-15.
- 伊藤嘉奈子 (2014). 「女子大学生によるスクールカウンセラーに対する認識と要望」 鎌倉女子大学紀要, 21, 77-86.
- 伊藤美奈子 (1999). 「スクールカウンセラーによる学校臨床実践評価ならびに学校要因との関連」 教育心理学研究, 47 (4), 521-529.
- 金屋光彦 (2012). 『スクールカウンセラー風便り』 第 19 回.
- 厚生労働省 (2011). 『こころの病気について知る』.
 〈http://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/detail_depressive.html〉
- Leong, F. T. L., & Zachar, P. (1999). *Gender and opinions about mental illness as predictors of attitudes toward seeking professional psychological help* British Journal of Guidance and Counselling, 27, 123-132.
- 文部科学省 (2007). 『スクールカウンセラーに関するアンケート結果』
- 文部科学省 (2014). 『文部科学省提出資料』 資料 7.
- 文部科学省 (2015). 『SC について (必要性に係る意識)』 学校における教育相談に関する資料.
- 中西三春・黒沢幸子・森俊夫 (2004). 「私立女子中高等学校における保護者のスクールカウンセリング

活動に対する要望の変化——スクールカウンセラーが導入された直後と1年後との比較」こころの健康, 19 (1), 61-72.

押尾直子・生島浩 (2004). 「スクールカウンセラーが外部の専門家として学校システムに介入する意義について」福島大学教育実践研究紀要, 46, 41-48.

佐光恵子・時田詠子・千明美佳 (2007). 「スクールカウンセラーに対する中学生の意識——イメージと相談ニーズの観点から」上越教育大学研究紀要, 26, 199-209.

吉澤佳代子・古橋啓介 (2009). 「中学校におけるスクールカウンセラーの活動に対する教師の評価」福岡県立大学人間社会学部紀要, 17 (2), 47-65.